



Title	「メタファー」と「メタ思考」：二重化原理の展開と観察者
Author(s)	鈴木, 純一
Description	特集: 隠喩 = Metapher (Metaphor)
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 58, 39-56
Issue Date	2010-05-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/43195
Type	departmental bulletin paper
File Information	MSC58-004.pdf



「メタファー」と「メタ思考」

—— 二重化原理の展開と観察者

鈴木 純 一

1. 「時間」概念と「メタファー」

ルーマンは、『近代科学と現象学』（1996）のなかで、フッサールの「時間」概念を問題視している。批判の矛先は、まず、フッサールの「時間」概念の理解を潜在的に規定している「メタファー」に向けられる。すなわち、フッサールが不適切な「メタファー」のもとで「時間」概念を把握しようとしているために、旧来の認識上誤ったカテゴリーのなかに「時間」が閉じ込められてしまったという。

（時間の把握に関して＝引用者）フッサールがここで依然として流れの隠喩、動きの隠喩に囚われていることが見て取れる。この伝統は、アリストテレス以来、そして再び、十四世紀における機械式時計の導入以来、以前と以後の区別という問題を、数の問題、尺度の問題、時系列の問題として扱い、時系列の基盤にあって測定されるべきものとしての〈動き〉を前提とした。（…中略…）（しかし、これでは＝引用者）フッサールが志向した技術批判を徹底的に貫徹することはできない。なぜなら時間測定そのものが——〔ある長さの時間の〕正確な反復可能性を保証しなければならない以上——すでに技術であるからだ。（…中略…）（時間の把握の＝引用者）基礎にある動きや流れや奔流といった存在論的ないし現象学的概念を堅持するだけの理由が、何かあるだろうか？¹

該当するフッサールの書は『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（1936）であり、そこでのフッサールは西洋近代科学の技術化への傾向を批判している、とされる。ルーマンの指摘と批判は以下のように要約できる。ここでのフッサールは、「時間」を喩える「流れ」「動き」「奔流」という旧来の「存在論的」なメタファーに囚われており、そのメタファーによって認

1 ルーマン『ポストヒューマンの人間論[後期ルーマン論集]』（村上淳一編訳）、東京大学出版会、2007、26頁。
なお、ルーマンは同様の指摘をすでに1960年代に（『信頼』）おこなっている。

識可能なカテゴリーを通して「時間」概念を「差異論」から遠ざけてしまった。このことは、アリストテレス以来続いてきた動く実体を前提とする「時間」理解の伝統から抜け出す機会を逸したばかりか、西欧の学の技術化に対する批判というフッサール自身の意図にも反することになる。

ルーマンの論文の真意は、フッサールが意図しているとされる「西欧の学の技術化に対する批判」を後押しすることにあるのではなく、フッサールの現象学に残存する存在論的な要素を、ルーマン自身のシステム理論（差異論）的なものへと書き換えていくことにあり、フッサールの時間概念の批判もその道筋に沿ったものである。すなわち、フッサールの時間の「実体的」な概念規定を、「差異」²を作り出すシステム論的な、つまり機能的な概念へと転換しようというのが目的である。この目的の妥当性の判断はここではひとまず保留しておく。注目すべきは、この批判的な転換作業を、「メタファー」がもたらす認識上の機能という側面から始めていることである。より具体的なものを介しての、いわゆる認知的な方法論としてのメタファー（ここでは「流れ」「動き」「奔流」が該当）が、逆に、その認知対象となっているより抽象的なもの（ここでは「時間」が該当）の理解を誤らせている、というのがルーマンの批判の要点である。

2. 「メタファー」観と観察者

修辞学を真理の追究や徳の要請には逆行するものとして、基本的にはネガティブに見ていたプラトンに対し、その批判の視点を逆手に取り、真理や徳に関する理解や説得の方法論として評価するとともに、修辞学の実践的な技術論を体系的に整備したのがアリストテレスであった。以降、レトリックは西欧の学問体系において極めて重要な位置を占め、ルネッサンスから18世紀にかけては人文教育の基礎とまでなっていた。すなわち、「真実それ自身のみでは、世界の承認を得られるほど強くはない、それは、みごとな説得（プレゼンテーション）という支えを必要とする」³というわけである。このような修辞学の伝統は、真理を体現する（客観的）存在者をあらかじめ前提としており、その言語（これも存在者）における対応を関連付ける手段・方法、つまり技術論の系譜として捉えることができる。長らくメタファーもレトリックの一つの主要な形として、このような実体的存在者相互の対応関係から導き出される「客観主義」のもとで理解されてきた。このような修辞学的方法論としてのメタファー理解を、人間の認知能力とその生成に結びつけることによって、原理的な転換を図ったのがレイコフやジョンソンだといわれている。

2 ルーマンのシステム理論に拠れば、時間概念の中心となる機能的な差異は「以前／以後」の区別となる。

3 スペインの作家でイエズス会士でもあったグラシアン・イ・モラレスのことばで、ルーマンが引いている。このような引用を見れば、コミュニケーションにおける「プレゼンテーション能力」の強制にも似た要請という状況は、別に現代に限ったことではないことを改めて認識させられる。

レイコフは、人間のおこなう概念的な認識やカテゴリー化による意味付与によって、身体と環境との相互作用およびそこから生成されるメタファーが、最も基礎的なフレームを成すことを明らかにしたとされる。以来、メタファーは認知言語学の領域で極めて重要な位置を占めるようになった。すなわち、人間の環境に対する身体的な経験能力が、認知図式としてのイメージ・スキーマを形成すると同時に、他方では、このスキーマが人間の経験を構造化し、抽象的な概念形成へと繋がっていくという相互的なメタファー・メカニズムが注目されるようになったわけである。外界にある既存の概念や事物の名称としての「客観主義的」言語観に基づけば、メタファーとはその名称の効果的な代用としての「レトリックに過ぎなかった」のに対して、新しい概念の生成、意味カテゴリーの拡張や変化等、認知上の重要な機能を果たすものとして、メタファーが捉え直されたわけである。

現在では、例えば、認知言語学に関する一般的な事典において、「メタファー」という項目は、理論上の分類に従って「概念化」および「イメージ・スキーマ」の記述の後に、すなわち身体と環境の相互作用を通しての認知図式形成メカニズムの説明がなされた後に、次のように解説されている。

「より具体的な概念領域（例えば〈貴重な資源〉）に関する言葉、知識をもとに、より抽象的な概念領域（例えば〈時間〉）を理解する方略のこと。前者を起点領域（source domain）、後者を標的領域（target domain）といい、メタファーは前者から後者へ対応関係を作り出す写像（mapping）であることになる。『時間を使う／無駄にする／節約する』などの具体的な表現は概念レベルでのメタファーを反映していると考える。」⁴

「起点」、「標的」ということばが現すように、すでにこの意味でのメタファーは、より抽象的な後者の表現（標的となる概念）を認知するために、前者のことば（より身体的・具体的な概念）が導入されるという目的論的な性格を有している。すなわち、引かれている例であれば、「時間」という「より抽象的な概念領域」を「より具体的な概念領域」をもとに理解するために、「貴重な資源」「使う」「無駄にする」「節約する」等の表現がメタファーとして使われていることになる。これらのメタファーによって、「時間」という現象が、我々がより具体的にかかわりあえる世界、より身体性との関連ある領域に一旦「写像」されることで、経験的な認知との関連付けが可能になるとされる。

レイコフの流れを汲む認知言語学の視点からいえば、人間のどのような記号的営為も、身体と環境世界の相互作用から派生するカテゴリーに基礎を持つ認知図式の延長線上に位置づけられる。いかに抽象度が高い概念であっても、もとを辿れば身体と世界との係わり合いから派生

4 辻幸夫編『ことばの認知科学事典』（2001）大修館書店、139頁。

したメタファーが出発点にあり、その変換の繰り返しと折り重ねによって獲得されたものである。逆に考えれば、どのような抽象的な概念も、原理的には、より具体的なメタファーを経由しつつ、身体性へと遡行する可能性を有している。とはいえ、西欧の形而上学と科学の歴史は、言語の記号化と高度な抽象化への過程に価値を置き、その発展を優先させた。このことは、その起源である具体性と身体性からの脱却と、抽象的な概念への従属化をメタファーに要請することを意味した。形而上学における抽象的な概念構造は、その起源として身体的メタファーを持つにもかかわらず、その具体性を隠蔽ないし従属化することで、事象のメタレベルにおける抽象的なネットワークを構築し、極めて効率的な操作性を獲得してきた。この構造の保証もとで、本来は起源であるはずの身体的な具体性は、再度メタファーとして、二次的（道具的）に利用されるようになる。すなわち、メタファーは、本来自らが起源でありながら、すでに見かけ上メタレベルにある抽象的概念から呼び出され、同一化と反復可能性を要請されることで、その理解と認識に寄与するより具体的・身体的な手段・方法論となる。西欧的「メタ思考」の高度な抽象化は、起源であるはずの身体およびそれが外界と結び結ぶ「メタファー」との連続性を、一時的に括弧に入れ、そのレベルを切り離すことで成立しているともいえる。

ところで、このようなメタファーによる表現が、ターゲットとされる概念のより具体的な認識と理解を促す機能を一般に有しているとしても、個別事例においては、その道具的用法上の「正しさ」あるいは「妥当性」が保証されているわけではない。実は、妥当性の判断は、それらの表現がメタファーとして「標的」の「カテゴリー」と認知的理解に適切であるかないかの判断をおこなう「観察者」⁵に委ねられている。すなわち、先の例では、「時間」を「貴重な資源」と思わないもの、「時間」は「使われ」たり「無駄に」されたり、ましてや「節約される」などということはありえないと考えるものにとっては、これらのメタファーは妥当な（より具体的な理解に寄与する）メタファーということではできない。あるいはこれらがメタファーであるということ自体が「認知」できない可能性すらある。冒頭で引用したルーマンの批判、フッサールの「時間」概念を規定しているメタファーへ向けられた批判は、このような二次的メタファーが寄与するはずの認識上のカテゴリー、あるいはその妥当性に対する疑問を、読み手という観察者の立場から発していたと考えられる。

3. 「魔方陣」という「メタファー」

認識の手段にせよ、体系の構築にせよ、常に抽象化への志向をメタファーに要請する形而上学的「メタ思考」を内包しつつも、物語という形式は、西欧においてもより自由で多様な機能をメタファーに許容してきた。これは、物語、特に小説という形式が、語り手、語られる世界、

5 この観察者は、メタファーの使用者である場合も、受け手である場合もある。

そしてその読み手等をいかにテキスト内に配合するかについては、基本的には制限がなく、むしろ異なる観察レベルの境界を自在に横断することでその自由度を拡張してきたことと関係している。⁶ この観察レベルの移行の形によって、物語に登場するメタファーにも多様な役割を意図的に担わせることが可能になる。

トーマス・マンは、晩年の大作『ファウストゥス博士』（1947）のなかで、主人公である作曲家アードリアン・レーベルキューンに、悪魔と契約を結ばせる。20世紀の閉塞した芸術創造に打開の道を探らせるためである。その道とは、本来それ自身で独自の具体的な表現（意味）を持ちうる音素材を記号的に組織化（抽象化）し、その形式化された組織という全体構造（メタレベル）からのみ音素材の表現（意味）が制御されるという、創作技法の徹底的な形式システム化を試みるものであった。しかし、打開の狙いはその先にある。すなわち、すべての音素材から表現上の個別的特性を一旦剥奪し、メタレベルから付与される抽象的な意味に限定することにより、逆に、音素材自身はどのような配置にあっても形式的に確定された記号的意味が保証され、この人工的な記号性がいわば第二の自然（素材）となり再び創造の自由と解放をもたらすのではないか、という可能性である。いわゆる「対立物の反転」のメカニズム、つまり、ここではいちど表現素材の自然的な「自由と無差別」（具体物）を形式的な「拘束と帰属」（抽象化）へ転換させた後に、こんどはその「拘束と帰属」の記号性自体を具体的素材とすることによって再び表現の「自由と無差別」へ反転させるメカニズムである。モデルは、伝統的な調性を解体し音素を中立的に形式化したシェーンベルクの12音技法であることはよく知られている。作者マンは、主人公の作曲家に、この技法のなかに、形式システム化の徹底化とそれゆえに可能な形式からの解放のパラドクスを読み込ませている。

ところでこの構造は、身体（具体）と概念（抽象）とを往還するメタファーの機能的特性の変奏とも考えられるが、「厳格作曲法」と名づけられたこの技法を、作曲家レーベルキューンは、構想中の段階で、この物語の語り手でもある友人ツァイトブロームに以下のように説明する。

全楽曲のどの音も、旋律的にも和声的にも、あらかじめ決定されたこの基本音列に対する自分の関係を証明できるのでなければならない。（…中略…）全体の構造の中で、そのモチーフ的機能を果たさないような音は一つとして登場してはならない。自由な音符はもはや一つもないだろう。（…中略…）決定的なことは、その中ではすべての音が、例外なく、その音列あるいはその音列からの派生物の中で場の価値を持っているということなのだ。それは僕が和声法と旋律法との無差別と呼ぶものを保証するだろう。⁷

6 文学史上におけるその最も顕著な例が18世紀末－19世紀初頭のドイツ・ロマン派であると考えられる。

7 トーマス・マン『ファウストゥス博士』（円子修平訳）、トーマス・マン全集Ⅶ、新潮社、1972、197頁。

これを聞いたツァイトブロームは、作者マンの意図を読み手に伝えるように、その技法の性格を「合理的な完全組織」と形容し、素材の機能的な意味が確定された「形式システム」としての完成度を強調する。しかし、物語の進行にとって、あるいはこの「厳格作曲法」の機能的意味の展開にとって極めて重要なのは、作者マンが語り手ツァイトブロームに何気なく口にさせる次のようなメタファーである。

「魔方陣だね」とわたしはいった。⁸

この隠喩はこの物語にとって、あたかも触媒のような役割を果たす。というのも、このメタファーのもつ意味の展開、接続、連関を語り手が確認する観察作業の進行につれて、レーベルキューンの構想する作曲技法に与えられていた性格は、当初のものから「ずれ」を生じ、二義性を帯びてくるからである。すなわち、それまでその形式性が強調され、合理性と記号性を特徴とする明示的秩序が支配的であった作曲技法を形容する表現が、そのような特徴と対立する方向へと向かい始めるのである。例えば、和音の形成は「偶然に、盲目の運命に委ねられているのではないか」というツァイトブロームの反語的問いと、それに対するレーベルキューンの「むしろ星まわりによって」という応答、占星術の影響のもとにある「迷信」と融合し始める記号の「合理性」、あるいは形式的な芸術の起源として引き合いに出される「魔術的なものへの信仰」の肯定的な評価。これらのことばは、すべて「魔法陣」というメタファーから再度喚起されたメタフォリカルな表現であり、それまでは極めて明晰な原理で構成されていると描写されていた「厳格作曲法」の性格を、まったく逆の方向から形容するものとなっている。いつしかツァイトブロームは「君の言葉とは逆に、ぼくは君の体系がむしろ人間の理性を魔法の中に溶かし込むような気がする。」とさえ口にするようになる。そして、これに応えるレーベルキューンの結論は、以下のようなものとなる。

「理性と魔法とは」と彼は言った。「おそらく同じ性質のもので、知恵とか秘儀への入門などと呼ばれているもののなかで、星や数への信仰の中で、帰一するものなのだ…」⁹

音の配列の徹底的な法則化は、他方では作曲家の主体的な恣意性を排除する。これは「作曲の前の一種の作曲」であり、「本来の仕事が始まる時には、素材の配置と素材の組織との全体」はすでに形式として決定されている。しかし、この形式システムの人工性こそが自然の必然性

8 同上。

9 同上。

へと反転させられる。唯一作曲家に残された可能性は、「変奏の創造性」であるが、これはいわゆる「自由の弁証法」と同じで、「客観的な必然性」を主観的に「自由な選択」と解釈するかしないかの問題へと読み替えられる。この場合、作曲技法と作曲者とはどちらがオブジェクトレベルにあり、どちらがメタレベルにあるのか、その外部からは決定できない。それはすでに観察者の判断（差異化）の問題となる。

彼は自分が作った秩序の強制に拘束されている、したがって自由なのだ。¹⁰

この両義性を可能にし、一方から他方への移行を自然なものとし、一見アンビバレントな表現の「容器」となっているのが「魔方陣」というメタファーである。このメタファーは二重の意味で重要な機能を果たしていると考えられる。まず、レーベルキューンの作曲技法自体の特徴を、より具体的な表現、概念に転換することによって、理解可能なものになっているという認知的な機能である。これは読み手が物語の進行を書き手の意図したとおりに読み込んでいくための道案内のような役割を果たしている。レーベルキューンの作曲技法が、素材と形式化、あるいは具体と抽象の反転のパラドクスを内包する両義的なもの、すなわちメタファー的なものであること、このことを、「魔法陣」というメタファーがもつ潜在的な性質を説明することによって、明らかにしている。しかし、より重要な点は、これによって「魔法陣」というメタファーが「メタファー」一般のメタファーともなっている点である。すなわち、「魔法陣」とは、「厳格作曲法」のメタファーであると同時に、そのような「メタファー」的構造の「メタファー」、観察レベルの移動によって意味を二重化すると同時に、そのような機能を「より具体的に」説明する表現とも考えられる。少なくとも、マンはそのような読み込みを可能にするような意味を、この物語において「魔法陣」というメタファーに与えている。

4. 二重化原理としての「メタファー」

ある表現が「メタファー」とであると理解される場合、必然的に意味が二重化されている、あるいは、そのような現象を観察する作業がおこなわれている。すなわち、ある対象Aに向けられたある表現Bが「メタファー」と言い得るのは、表現Bが一般的に（そのまま）意味する対象はAではないということが前提となっている場合である。表現Bが表すものが、例えば一般的には対象Cを意味する（とりあえず「本義」と呼んでおく）と解釈されるにもかかわらず、それが対象Aに向けられている、すなわち表現Bの一般の意味とは別の（比喩として

10 同上。

の) 意味 (とりあえず「転義」とよんでおく) で用いられていると理解されたときに初めて、表現Bは「メタファー」としての機能を果たしていることになる。

この表現Bがメタファーとして用いられた場合の、このような意味の二重化、すなわち本義と転義の差異は、表現そのものからは客観的に告げられることはない。というのも「隠喩」である限り、それが「比喩」であること、本来的な意味とは別の意味で用いられた喩えであることは、「隠されている」ことが定義上前提となっているからである。ということは、ある表現がメタファーという意味の二重化を志向する表現であることを明示する標識は、その表現自体には含まれず、そのように解釈され観察される場が他に必要となる。すなわち、ある表現がメタファーであることは、その表現のメタレベルの場でのみ確認されうる。このレベルをとりあえず「二次観察レベル」と呼んでおく。¹¹

先の例に戻ろう。表現Bがメタファーであるということは、単純化すれば、この表現が対象Cのみを志向する意味X (本義) と対象Aをも志向する意味Y (転義) の二重性をもち、両者が何らかの形で差異化されていることが二次観察の場で意識されると同時に、この表現BがこのXとYの二重性を許容するものであること、妥当なものであることが、やはりメタレベルで理解されていることを含意している。その際、対象Aと対象Cの関係を考えてみれば、両者は表現Bの二つの意味ベクトルであるXとYによって、対象相互の関係においても、同一化と差異化の二重の方向性を認めることが出来る。

すなわち、表現Bの意味のベクトルXにおいてはまず対象Aと対象Cの差異が明らかにされる。というのもXは本義のベクトルであり、その意味は一般的に対象Aのみに妥当する構造を有しているからである。それに反して、意味ベクトルのYは、もともと対象Cを志向するために呼び出された転義であり、起源である対象Aをも何らかの形で含意するのを前提にしつつ、対象Cを際立たせるために呼び出されたものと考えられる。とするならば、ベクトルYは対象Aと対象Cの同一化を志向するベクトルである。

この二重性を一般化すれば、メタファー表現には、意味を二重化することによって、複数の対象を呼び出すが、この対象間の関係を差異化する志向性と同一化する志向性が内在している、ということができる。いずれにせよ一見相反する「差異化」と「同一化」が、表現の対象間においても併存していることが重要で、メタファーという観察形式はこの〈差異化／同一化〉差異を使い分け、あるいは交代させることによって、メタ (二次観察) レベルにおける意味の解釈と理解の制御を可能にしていると考えられる。この〈差異化／同一化〉差異は、理論的には極めて豊かな展開可能性を秘めており、この構造は多くの点でルーマンのシステム論がもつ自己再生産メカニズムとパラレルな関係を持つと考えられるが、その点に関しては後でもう一度触れる。

11 この原理に関しては、以下の拙論で論じた。『二次観察としてのメタファー』、日本独文学会研究叢書037、2005、27-37頁。

ところで、この二重化は、ある表現がメタファーである場合、必然的に表れざるを得ないものであるが、逆にこの二重性を、テキストの展開の方法論として、すなわち意図的な操作ないし選択として使用することも考えられる。実際、例えばトーマス・マンの物語世界におけるメタファーは、観察の形式であると同時に語りの方法論ともなっており、人物や事物、あるいは出来事の相互の関連性と異質性を自在に操る一つの創作技法とも捉えられる。先の例で見た「魔方陣」の場合でも、主人公の編み出す作曲技法が極めて人工的な形式に基づくものであることと、しかし、その徹底化が反転を引き起こし、いわば第二の自然ともいえるべき表現素材として自律性を獲得することの二重性を、当初は両者の差異を際立たせる形で、しかし語りが進むにつれて、両者が同じ原理から生成した表裏の関係であることを強調する形で明らかにしていた。その際、この作業のいわば触媒として機能していたのが「魔方陣」というメタファーであった。

マンの場合特徴的なのは、このようなメタファーが当該の物語においてどのような意味を持ちどのような役割を果たしているのか、このメタファーによって関連させられるものあるいは差異化されるものは何かについて、物語の語り手が読み手を導いていくことにある。すなわち、このメタファーによって物語はどのように進行しているのか、さらに言えばどのように読まれるべきなのかを、物語自身が確定していく。語り手は、いわば作品内部に密かに（あるいはあからさまに）使われた天上の案内人として、擬似的に物語のメタレベルに立つ二次的観察者という役割を果たす。これに従う読み手は、そのメタファー解釈をなぞることで、物語の構造と道筋が概念上のプログラムによって念入りに仕組まれたものであることを確認させられてしまうであろう。ここでの、メタファーはメタ思考の配下にある方法論として、物語の安定的な展開に寄与している。

差異と同一の二重性——メタファーのこのような特性を創作上の技法と捉えれば、それは「切断」と「接続」の方法論と言い換えることが出来る。トーマス・マンに限らず、物語に現れるメタファーは、多くの場合、これらいずれかの機能を果たしている。「切断と接続」——これは言い換えればメディア（媒体）一般を規定する基礎的な性格でもある。この意味において、メタファーは、メタレベルの指示に従ってオブジェクトレベルを編集し、物語世界を構築していくメディアとして考えることも可能である。

とはいえ、メディアとしてのメタファーは、その忘却された起源である身体性に回帰し、メタ思考の制御をすり抜け、あるいはメタ思考そのものを変化させる場合もある。例えば、ブルーストの物語における回想の連鎖は、メタファーの結合機能を抜きにしては考えることは出来ない。ただしブルーストでは、メタファーの出現が、多くの場合「身体感覚」から喚起されることにより、語り手の「想起」という「接続」と、しかし他方ではそれは偽りの感覚に過ぎないという「覚醒」による「切断」とが、メタ主体による制御によってではなく、いわば呼吸のリズムのごとく交替する。このようなメタファーは、メタレベルにおける概念的な見取り図をむしろ何重にも書き換えていく。この意味において、配下にあるはずの身体的体験としてのメタ

ファーは、ここではメタレベルの概念地図に動揺をもたらしているともいえるだろう。¹²

あるいはカフカの小品に現れる小さな動物たち。すでに己が使われたメタファーであるかどうかの判断さえも拒否する「身振り」として、すなわち機能的メタファーであることを回避するメタファーとして現れているかのようなのである。彼らの行為の「動物的」自明性と身体感覚の直接性は、自らを必要とし、故に自らをメタファーとして呼び出してくれたはずのメタレベルの存在を、むしろ無効であると宣言する。よく知られた『比喩について』という小品では、メタファーの二重化作用を直接的なテーマにしているにもかかわらず、この二重性を確認するメタレベルの場が不可能であることが極めてあっさり述べられている。比喩についての談義が延々と繰り広げられたあげくの「そういう君のことばも比喩だね。」という切り返しの締めくくりは、自己言及構造の論理的矛盾に巻き込む効果というより、行き場のない、すなわち永遠にメタレベルに回収されることのないメタファーの無力感自体のメタファーとなっているのではないか。¹³

5. 「メタ思考」と「メタファー」

西洋の形而上学の歴史は、大きく捉えれば、その対象が自然であれ人間であれ、メタレベルからの世界把握を目指してきたと考えられる。すなわち世界の事象の多様性を、その形態や属性、性質に応じて分節し抽出し、またそれらの関係性を合理的に括りうる様々な概念の束を編み出すことで、現象や事象のメタレベル（形而上）における抽象的な意味のネットワークが構築されるとともに、そこから世界を普遍的に（＝反復可能な形で）把握する、あるいは特徴付けることができる、相対的に安定した視点のシステムを確立してきた。このような「メタ志向」は、長らく、西欧史における「メタ思考」の優位性を特徴付けてきた。

「メタ思考」は、西欧思想の歴史において、様々な形で現れているが、その根幹をなすのは、思考対象の思考そのものからの独立（とりあえず「客体」と呼んでおく）と、そこからは不可侵の観察レベル（とりあえず「主体」と呼んでおく）の明確な形式的分離である。¹⁴ この分離は、客体世界の抽象化・組織化による概念的思考を推進するとともに、相対的に安定したメタレベルから客体を操作対象とし、その効果的かつ洗練された方法論・技術論を獲得することにも寄与した。後にこれが目的合理性あるいは道具的合理性の温床としていかに否定的に見られよう

12 プルーストの隠喩表現の分析、というより「隠喩的な世界体験」については、以下の書に詳しい。保刈瑞穂『プルースト・印象と隠喩』、ちくま学芸文庫、1997。

13 カフカの「小動物」については、以下の作品集と解説を参照されたい。『カフカ・セクションⅢ』（浅井健二郎訳）、ちくま文庫、2008。

14 認識論における観察者と観察対象の相互独立に関しては、ハイゼンベルク以降自然科学においても疑問視されていることも想起されたい。

とも、その現実世界における圧倒的な有効性は西洋の科学的思考・技術の世界的制覇が証明している。この過程は、人間の認知的な世界把握の起源が身体的メタファーにあるにもかかわらず、そのメタファーによって構築されたメタレベルの概念世界が、今度は逆に身体的なメタファーの認知機能を操作的・道具的に制御するようになるプロセスと平行な関係にあるだろう。仮に、このことを批判の対象とする場合でも、その批判の形式自体が、すでにメタ思考に基づくものでなければ理解不可能な状況となっている。¹⁵

レトリックとしてのメタファーの歴史も、長らくこの「メタ思考」の方法論・技術論という把握のもとにあった。すなわち、それが対象の理解を促すような効果を目指そうが、あるいは隠されていた特質を明らかにする発見的機能を意図しようが、そのようなレトリカルな目的論によって用いられたメタファーは、いずれにせよメタレベルにある主体によって目論まれた効果の範囲内にあり、道具的性格を有している。ここでのメタファーは本義と転義の明確な差異を有し、この差異は不可逆的なヒエラルヒーとしても機能する。メタファーは、対象(オブジェクト)レベルにおけるその適応が問題となるだけで、その派遣元すなわちメタレベルにある形式的意味のシステム自体を変化させることは、一般には、回避されてきた。

このような歴史的文脈から照らしたときに、例えば、デリダのようなポストモダニストが、メタ思考のもとにあるメタファーを批判的に論じる「身振り」とともに、両者の支配従属あるいは本義転義という階層性への問いそのものを、「脱臼」し無力化しようとする試みがいかに困難であるかが鮮明に見えてくる。

一方では哲学の産物にとどまる隠喩概念を利用しながら、哲学の隠喩系をそれとして外部から支配することは不可能である。すると、ただ哲学のみが隠喩という自己の生産物に対して何らかの権威を専有することになるだろう。だが他方では、まさに同じ理由から、哲学は自らに与えるものを剥奪されている。自分の用いる道具立てが自分の領野に属しているゆえに、哲学はみずからについての一般転義学と一般的隠喩系を支配する能力を持ち得ない。(…中略…)したがって「基礎的」「構造づきの」「根源的」と言われる哲学的諸対立の構造化を条件づけたいくつかの転義を形容するための、固有に哲学的なカテゴリーは定義上存在しない。すなわち「基礎的」「構造づきの」「根源的」といった語はすべて、そうした転義学の表題を構成するような「隠喩」なのだ。そして、「言い回し」「転義」「隠喩」といった語もこの規則を免れはしない。¹⁶

15 むろん、そのようなメタ思考の形式システムを出し抜くような批判の試みもなかったわけではない。アドルノの「否定弁証法」はその代表的な例と考えられる。

16 デリダ『哲学の余白(下)』(藤本一勇訳)、法政大学出版局、2008、111頁。

すべてを振り出しに戻し、隠喩の起源を消去する、あるいは普遍化するこの再帰的な切り返しは、とりあえず隠喩がことばの転義的運動の連続性という構造を確保するように見えながら、最後の最後でその隠喩を無効にするポーズまでも隠喩化し、メタファーの意味そのものを決定不可能な状態へと導いていく。身体から離れ、二次的になったメタファーの特性である「本義・転義」による階層化運動は、それが徹底化されることで「本義・転義」そのものが決定不可能性へと追い込まれ、さらにはその作業の有効性さえも宙ずりにされてゆく。デリダー流の脱構築的な解体劇場である。

すべての言語行為は無限に連鎖するメタファーの生成メカニズムである、といった命題そのものは、実は歴史的に様々な形で変奏されてきた。その明確な、そして多少の銜学的な理屈付けを伴った最初の宣言をおこなったのは、ニーチェであろう。¹⁷そして、この命題は、この命題自体をメタファーと解釈することで自己言及パラドクスへと追い込まれると同時に、決定の先送りないし決定の二重性という結論に回収されるのが常となっている。ニーチェの言説も、トーマス・マンによって、「ニーチェのことばを字義通り受け取ってはいけない」というレベルへと移行され、決定の回避が優先されている。これを、あえて自己否定的自己言及命題という形式システムと考えつめれば、ゲーデル的なパラドクス問題圏へとメタファーは入り込んでくることになる。¹⁸

このような方向性は、もとをたどればニーチェの「すべてはメタファーである」という全称概念的表現に理論的には内包されていたものである。ただし、ニーチェはメタファーを二種類に分けていた。一つは、身体によって可感的なものを「ことばという記号」へと転換するもの、もう一つはその記号が概念化し、同類の可感的な現象を反復的にその記号概念によって表すものの二つであった。

この場合、メタファーのベクトルは、先ほどと同様、二つに分けることが出来る。一つは身体から記号へ、もう一つは記号から（すでに記号化された）身体へ、という二つの方向性である。メタ思考のメタファー支配とは後者のメタファーを指す。すなわち、すでに概念化され記号的な意味が与えられたことばを、ある事象の理解に適応するという機能であり、一般的に理解されているメタファーはこの運動である。仮にこれを「二次的なメタファー」と名づければ、ニーチェのいう最初のメタファー、最初の「木の葉」に与えられる「一次的なメタファー」とは、先に認知の出発点としての身体を起源として想定したメタファーに対応するであろう。¹⁹このような起源を忘却したあとで、すでに記号と化した事象間で相互に交わされるメタファーが

17 ニーチェ『道徳外の意味における真理と虚偽について』、ニーチェ全集第Ⅰ期第2巻、白水社、1995。

18 すでに1980年代に柄谷行人が形式化の問題として繰り返し取り上げていた。『隠喩としての建築』、講談社、1983、63頁。

19 ちなみに、ブルーメンベルクのいう「絶対的メタファー」とは、メタファーのこの現象を指しているように思われる。Blumenberg, Hans: Paradigmen zu einer Metaphorologie, stw1301, Frankfurt a. M, 1999

二次的なメタファーであるが、これは、先ほどの文脈でいえば、西欧における「メタ志向」と「メタ思考」の帝国における戦略的なメタファー、技術論的・方法論的なメタファーであり、存在論を前提とする可視的なものを操作し、あるいは媒介する。デリダの批判的なまなざしが向けられ、ルーマンの差異化機能への転換が目論まれたのは、このようなメタファーに対してである。

但し、デリダの脱構築は、身体的メタファーへの単なる回帰ではないことも確認しておかななくてはならない。彼は「忘却された起源を発見した」かにも見える身体的なメタファーの復活劇に対しても疑いの目を向ける。デリダによれば、記号的なメタファーの形而上学的な支配を批判する際に、身体的なメタファーによる起源へ遡行する身振りは、決して有効な手段とはならない。両者は、実は、相互に反転する可能性を原理的に有している。マンの物語における「魔法陣」というメタファーの一見相反する両義性も、このような反転原理によってもたらされたものであった。メタ思考による道具的メタファーの帝国も、身体的メタファーへの回帰という起源の標榜も、相互依存関係にあり、一方を根拠として他方を批判する形では、決して「解体」されることはない。すべてを無効化するかに見えるこの袋小路的循環をかいくぐるような、メタファーに対する批判的な記述は果たして可能なのだろうか。²⁰

6. 二次観察としてのメタファー

ルーマンはすでにそのような視点の枠内にあるメタファーへの問いのみならず、西洋の形而上学的問い一般に見られるひとつの前提に批判的な眼を向けていた。すなわち、「同一性と反復」を基礎とする（せざるを得ない）存在論という前提である。これに対して、ルーマンが対置するのは、「差異と観察」を契機とするシステム論、すなわち機能論である。形而上学における「存在という概念」を「観察という機能」へ転換すること、要点はここにある。これに伴い、言語一般のメタファー的現象を測る視点も、概念＝存在論が要請する認知・対応・同一化という実体的な基準から、差異＝システム論が遂行する観察・接続・再生産という機能的な基準へと移行する。ここでは、メタレベルから派生する概念的メタファーも、そこから遡行する形で想定された起源としての身体的メタファーも、すでに実体論としては接続機能を失っている。このような状況への移行は、近現代の機能分化社会においては必然的なものであるとルーマンの文脈では考えられている。

先にあげたルーマンのフッサール批判も、フッサールの時間に関するメタファーの存在論的な性格へと向けられていた。「流れる」メタファーによって性格づけられる「時間」は「流水」

20 このようなメタファーへの批判的な問いの必然性をここで根拠付けることはできない、とだけ確認しておきたい。そのような試みはいずれもデリダの罠に絡めとられてしまうであろうから。

等の実体的なものとの対応を前提とせざるをえない。実体としての時間は、「同一性と反復」の性格を問われる存在論的枠組みにおいて把握され、測定可能性を伴った操作的技術論へと容易に転換される。これは、フッサールが、「技術」を西欧の理性の誤った使い方とし、現象学という非存在論的な潜在力をもつ視点によって、そこから批判的な距離を取ろうと試みていることと矛盾する。にもかかわらず、結局はメタレベルから派遣されたメタファーによって実体的な「時間」が呼び戻された、と診断されたのだ。ルーマンのフッサールに対するアンビバレントなスタンスの所以である。

ルーマンのシステム理論は、このような実体論からの出発も、あるいは身体論への回帰もすでに志向できなくなっていることを自覚している。システム理論は差異から出発する（しかない）。あらゆる現象は、差異が現れたときに、つまりAと非Aが区別され、それが観察されたときに始めて立ち上がる。区別をおこない、差異を生み出し、観察（可視化）するものを、当の差異の一方（A）に割り当て（「システム」）、他方（非A）を「環境」と名づける。システムのオペレーションとは、差異をつくり、差異を観察し、差異を別の差異へと接続していくことをいう。このシステム内における差異の連続的な再生産のメカニズムに「オートポイエシス」ということばすら借用している。

システムによるこの差異の生産と観察の連続というオペレーションは、システムの内部でのみ可能である。にもかかわらず、システムの外部とも関係を持つことができる。その形式は、いわゆるリエントリー（再参入＝内部転写）といわれているものである。システムはみずからと環境を区別することで、指示するもの（自己＝システム）とそれ以外のもの（他者＝環境）との差異、すなわち「システム／環境」差異をつくる。しかし、このままではこの区別のオペレーション自体は、システムの観察対象とはならず、システムにとっての盲点にとどまる。システムはこの「システム／環境」差異を、再びシステムの内部に取り込み（リエントリー＝再参入＝内部転写）、観察・言及可能な対象とする。すなわち、システム内部において、自己であるシステムと、そのシステムから区別された他者である環境との差異を対象として観察する。従って、実際は、システム内の視点に調整された「自己言及／他者言及」の差異にすぎない。しかし、システムにとってはこの形式以外には外部であり他者である環境を観察する方法はない。すなわち、本来「システム内部に取り込まれた形での環境」にすぎないのだが、これをシステムは「環境そのもの」として観察する（観察せざるをえない）。このことをルーマンはリエントリーに伴う、あるいは自己言及システムがおこなう観察に内在する不可避のパラドクスと捉えている。

このパラドクスは、他方では、自己言及システムが本来抱え込んでいるトートロジーを見かけ上回避する、あるいは先送りする。仮に、システムによって変形された形であっても、外部にある環境の要素を（「刺激として」とルーマンは言っている）内部に取り込まなければ、システムは常に同じ差異の観察を繰り返すしかない。これは、システムとしてのオペレーションの

継続を危うくし、システムを衰弱させる。従って、たとえリエントリーというパラドクスの形式であれ、環境との関係を確立すること、そして見かけ上であれ、他者言及を擬似的に（二次観察の形で）おこなうことが、システムを活性化し駆動し続けるための必要条件となる。パラドクスがトートロジーを回避する、あるいはトートロジーがパラドクスを要請する。ルーマンのシステム論の基本的な構図である。²¹

システム内における自己言及（システム言及）と他者言及（環境言及）は常に交替する。両者の差異を確認することが、新たな要素の取り入れと意味の接続を継続するために必要だからである。両者間を往還する観察（言及）の動きをルーマンは「振動（Oszillation）」と呼び、後期の著作では頻出するようになる。「振動」とは、言い換えれば、システム（自己）言及→他者（環境）言及→（最初の言及によって状態の変化した）システム（自己）言及という螺旋的な意味転換（接続）、振子的な漸進現象である。この動きは、メタファーの継続する二重化作用が一般的なものであることを形式的に表現したものとも解釈できる。観察（言及）のどの段階も、すでに二次レベルでの観察であるが、しかし、後続する観察に対しては一次レベル観察として対象化される関係にある。すなわち、あらゆる観察は、オブジェクトレベルとメタレベルの交替と移行を原理的に内包しつつ、意味の接続、メタフォルカルなことばの交替を継続しているものであり、先のメタファーの二つのベクトルは観察の一般的な構造、「振動」というシステム内部と外部の擬似的な往還現象を表しているとも考えられる。

ルーマンのシステム理論にとって、二次観察レベルこそが、差異がそこで初めて観察対象になるという意味において、いわゆる「起動点」である。ルーマンの理論は、歴史性に基づいた始原としての「起源」、あるいは実体の変化に基づいた時間的な「過程」を、観察の前提としているわけではない。気がついたとき、それはすでに始まっており、位置は二次観察レベルにある、という意味で、最もリアルな出発点を採っているに過ぎない。²²

このような観点に立てば、「メタファーとメタ思考」の関係にも、やや異なる光を照射することができるかもしれない。メタファーは、「身体と概念」、「意味するものと意味されるもの」、あるいは「本義と転義」という構造を「起源」として有しているわけではない。但し、そのような考えを、「実体」とは相容れぬものとして否定するわけでもない。事実、西欧形而上学の「メタ思考」への志向性は、そのような構造をむしろ実体的なものとして記述し、抽象的概念の支配下に置くと同時に、技術的操作性の基盤としてもきた歴史がある。しかし、システム論から見れば、それとは異なるメタファーの「メタ思考」の相が現れる。「起動点」は区別であり、その差異化であり、その観察であり、[自己言及／他者言及]差異のリエントリーであり、そして

21 ルーマンのシステム論のほぼ最終的かつ体系的な姿は、最近邦訳が出版された『社会の社会（上・下）』（馬場靖雄他訳、法政大学出版局、2009）で確認することができる。

22 この「起動点」は、それが「存在論」に依拠するものでないことを除けば、ハイデガーの文脈における「世界内存在」の意味とパラレルな関係にあるだろう。

何よりも両観察の間の「振動」である。この「振動」は擬似的に、先送りの形で自他を接続する、先取りされた媒介でもある。ここでは、メタファーの意味の二重化という特性は、「同一性／差異」差異化を繰り返す自他の往還運動の触媒ないしはメディアとしての機能とも捉えることができるだろう。メタファーは、この意味で、常に「メタ思考」＝「二次観察」を誘発し続ける。とすれば、メタファーにはやはり「魔法陣」、但し、「常に空欄を生み続ける魔法陣」、あるいは「先送りが接続を保証する魔法陣」というメタファーがふさわしいであろう。²³

(2009年11月27日受理、2010年2月10日最終原稿受理)

23 メタファーの起源と連鎖の問題は、それがメタファーそのものの現れとメタファーの継続的な維持を別の論理から説明しなければならないという点で、ベンヤミンにおける法措定的暴力と法維持的暴力の関係と比較できるように思われる。

《Zusammenfassung》

Metapher und Meta-Denken

Junichi SUZUKI

In dieser Abhandlung geht es um die Beziehung zwischen Metapher und Meta-Denken in europäischen literarischen und philosophischen Texten. Im Mittelpunkt stehen die Analysen der neuzeitlichen Texte als Beispiele, denn dort kann man die besonderen Eigenschaften der europäischen Metapher erkennen. Als ein Gesichtspunkt der theoretischen Analyse wird die Systemtheorie Luhmanns berücksichtigt.

In den ersten beiden Abschnitten wird zuerst Luhmanns Kritik an den Metaphern Husserls im Bezug auf Zeit-Begriff überprüft. In der Folge wird klar, dass die abendländischen Metaphern hauptsächlich die Neigung haben, durch das Konkrete das Abstrakte sichtbar zu machen und damit auf der Meta-Ebene das Begriffe-System zu konstruieren. Auf diese Weise haben die Metaphern zur Hierarchie zwischen dem Metaphysischen und dem Physischen beigetragen.

Dass man in der Literatur diese Hierarchie manchmal dekonstruiert hat, zeigt sich in den dritten und vierten Abschnitten, wo die Metaphern von Th. Mann, Kafka und Proust analysiert werden. Anschliessend wird der theoretische Grund für diese gegensätzlichen Richtungen der Metaphern betrachtet. Dies führt zu dem Ergebnis, dass die Erscheinung dadurch ermöglicht ist, den Wortsinn verdoppelt zu machen. Die Verdoppelung kann man als eigentliche und grundsätzliche Funktion der Metapher ansehen. Dabei wird auch die Hierarchie zwischen Meta-Ebene (Begriffe-System) und Objektebene als eine anscheinend unvermeidliche Struktur betrachtet. Es gibt darum eine Genealogie der Kritik, die diese Hierarchie als Unterdrückung anklagt, z. B. die Kritik Nietzsches oder die Dekonstruktion Derridas.

In den letzten beiden Abschnitten zeigt sich zuerst die Ungültigkeit dieser Kritiken, weil sie sich eine Paradoxie der Selbstreferenz bilden müssen. Stattdessen kann man in der Systemtheorie Luhmanns eine andere Möglichkeit finden. Luhmanns Theorie betont, dass jede Betrachtung unbedingt von der Meta-Ebene (in der zweiten Ordnung) zur Objekt-Ebene übergehen muss. Dieser Übergang wird in den späteren Aufsätzen Luhmanns

als Oszillation (fortdauerndes Wechseln zwischen Selbstreferenz und Fremdreferenz) ausgedrückt. Zum Schluss wird die funktionale Gleichartigkeit dieser Oszillation mit der Metapher überhaupt gezeigt.